

まちと公園

① ワークショップ方式の公園づくり かに山公園の例から

奥村玄 田中弘子 宮沢好 山口健太郎

一 はじめに——「まちへ」

いよいよ、今日は、馬場町に住む人へのインタビューの日だ。はじめての所ではないが、普段は目的地へ車で行き、用が済むと車で帰ることが多い。考えてみると、町の人と接する機会が、意外と少ないのに気づく。役所に対する注文、意見等、どんなことを言われるのだろうか。不

安な面もある一方、貴重な体験も出る。最近、対人恐怖症気味だが、ともかく、気分わずに行ってみよう。

「知れば、やさしくなれる」。私自身への言葉であるとともに地元の人にもいえるはずだ。

Kさんの家に着く。子供会のお母さん方がお待ちかねだ。古くから馬場町に住んでいるOさん。嫁に来て

十数年のTさん。御主人の仕事の関係で転居の多いKさん。それぞれ、馬場町に住む年数は違うが、子供に対する願いやまちへの思いは、共通したものがあるようだ。

ともかく、今の子供は忙しい。おけいこごと、スポーツクラブ、塾、文化クラブ……。この町内は、毎月のように、子供会の催しが開かれている。四月歓送迎会、五月歩く会、

六月空缶回収、八月夏祭り、キャンプ、秋運動会、イモホリ、等々。仲々、活発だ。催し物をセットするにも、日程調整が大変だ。ソロバンの検定試験、ソフトボール大会の日は避けなければならない。それでも、幼稚園までの子供は、親と一緒に参加するが、小学校低学年迄が主体。三〇人参加すれば大成功とのこと。しかし、空缶ひろいには、小学校六

① ワークショップ方式の公園づくり
② 私たちのコミュニケーション・パーク作り

一 はじめに
二 身近なまちづくり試行の背景
三 公園づくりワークショップ
四 まちづくり道入門
五 新たなはじめに

年生を中心に、登校班一三組、約一〇〇人が参加し、五年間続いており定着しつつある。

町内のお年寄りも、色々頑張っている。おみこしを二年かけて、手づくりで作ったおじいさん。火のおこし方、ワラジの作り方等を子供達に教えているおばあさん。地域のいわれを訪ねる「歩く会」を開いている人等々。

お母さん方は、身近かに、車に気を使わず子供達がノビノビ遊べる広場があればと、話しがはずむ。ハンドベース大会、ヒコキを飛ばそう会、ミニ運動会……。そして、何よりも大切にしたいのは、自然をいかした水辺と土のある広場のようである。

帰る道すがら、お母さん方のエネルギーに感服することしきり。子供の催しに、我々も参画させてもらい、楽しみながらこのまちを皆で見直すきっかけがつかめそうな気がする。手探りの状態で始める、住民参加型の公園づくり。色々の困難が予想されるが、この様な地域の人々と

の出会いが、きっと、活動の源になるに違いないと思えた。

二 身近なまちづくり——試行の背景

① 都心部から周辺・郊外部へ——区の魅力づくり

昭和四十年代、本市は、急激な人口増加にみまわれた。公共施設の量的な不足を充足するにも、困難な時期であった。しかし、その渦中において、従来のわが国の都市計画がおりがちであった、道路、鉄道、港湾、建築、公園、廃棄物等、単機能の是非によって縦割的に対応する限界を越えるべく、多くの試みが開始された。また、都市環境を総体としてとらえ、企画・計画段階から、空間的バランスを考慮する「都市デザイン」が、都心部や計画的開発地域においてなされ、昭和五十年代に入り、徐々にその姿を現わしてきた。

横浜が、都市として自立的な核を形成してゆく上で、都心部の取り組

みは大きな意味をもつ。しかし、市民が日常的に生活し、多くの時を過ごす身近な地域環境のあり方について、都心部等で展開された計画の質をもち、検討を進めることも、また重要な課題である。「区の魅力づくり」は、こうした地域のまちづくりとして、市民生活に密着した、きめ細かい配慮を行い、地域の歴史や文化的資産を保全・活用し、水辺や緑などの自然的特性を生かすことを目指し、昭和五十五年から昭和五十七年にかけて、基本調査が行われた。その中で提案された構想は、逐次、事業化されつつあり、「水と緑と歴史のプロムナード事業」の展開の礎となっている。

② 新たなまちづくり手法の必要性

区の魅力づくりを実現してゆくためには、従来、都心部で展開されてきたものと一味違う手法が要求される。商業・業務機能が集積する都心部において、プロムナードを整備する

場合、その目的を理解し、自らの経済的効果を期待し得る地元の存在

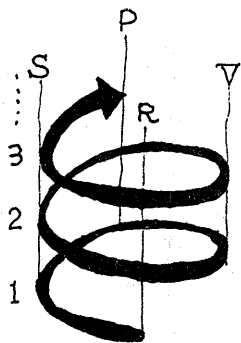
がある。もちろん、個々に反対がないわけではないが、商店街の活性化、観光振興等、地元サイドで共通の目標を管理できる基盤がある。一方、一般市街地においては、事業に対し総論において賛同が得られても、多様な生活主体がおり、必ずしも個々の利害が一致するとは限らない。例えば、歩行者空間の拡大は、地域に住む人が利用する上で、その実現は切実なものである。一方、道空間を停車スペースとして利用している沿道の企業主・商店主にとっては、死活問題にもなる。これでは、せつかくの計画もだいなしに

なりかねない。与えられたデザインを検討するだけでは、誰かしら異議を申し立てる者が出てくる。はじめから、創造のプロセスに巻き込み、共同でいくつもの案や、それをめぐる意志決定を丁寧積み上げて行く事が、実りの多い成果につながると考えられる。

③ ワークショップ方式によるまちづくりの可能性

図-1 ワークショップとは

- ・作業所
 - ・集団による創造行為を保障する方式
 - ・一つ一つの要素を大切に
- Resource : 事実や関連情報 (共有財産)
 Score : よりよい創造を生むための手段 (創造手段)
 Performance : 創造に資する行動 (経験)
 Valuation : 行動結果を評価する (討議)

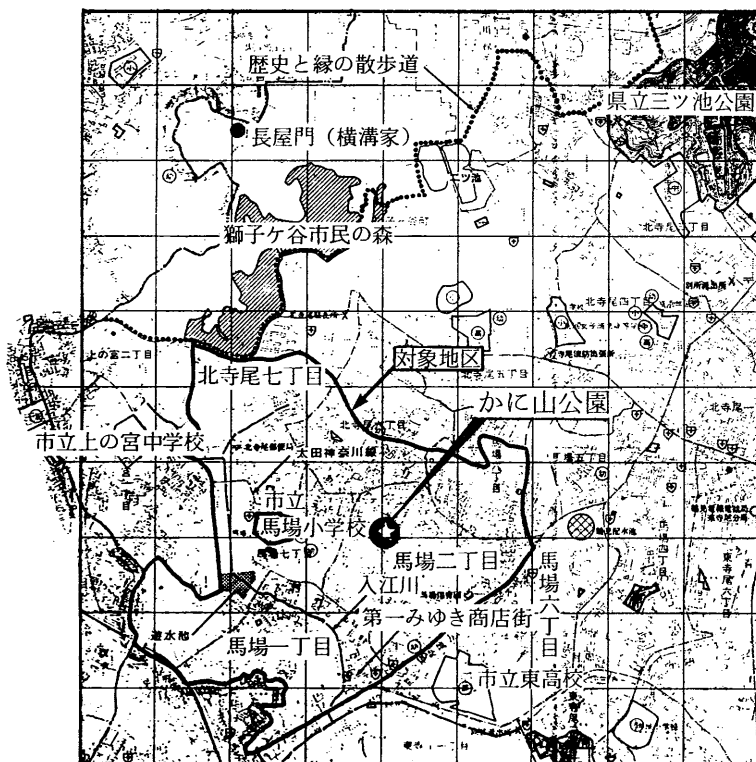


ワークショップ方式によるまちづくりは、ローレンス・ハルプリンにより、一九六〇年代前半、先行的に行われた。その成果は、ニコレット・モール等の整備に示される様、デザイン的にも、卓抜なものが創り出された。多人種、多階層が混在する

アメリカにおいて、多様な価値観を持つ人々が、個性を尊重し互いが集団による創造の過程を取得しながら、相乗効果を発揮できる可能性を示した。その手法は、R・S・V・Pサイクル(図-1)として、わが国にも紹介され、一九七〇年代から、農村計画を立案する際応用されてきている。農村の場合、集落から出発しないと土地利用計画が立てられない状況があるが、小領域を重視し、まちづくりが総合的に展開される必要性は、都市においても同様であろう。昭和五十九年度、鶴見区の魅力づくりの一環として、馬場小学校区を対象に、係わりの深い局区職員(八局・二十一課・二十五人)が参加し、まちづくり計画を策定するため、ワークショップ方式による共同調査を行った。鶴見区馬場町は、横浜市北部の港北区境に位置し、昭和三十年代後半からの急激なスプロールによる典型的な姿をもつ町である。居住環境の整備が宅地化のスピードについていけず、狭隘な地区幹線道路、洪水の常襲、水路の汚濁等、多くの

問題をかかえていた。近年、既成市街地からスプロール地区へ都市基盤整備が進行しつつあり、当該地区も、雨水調整池や下水道整備、道路拡幅、学校施設の再整備が進められる段階にあった。また、地元において、居住環境の総合的な整備方針を

図-2 馬場小学校区



ても、こうした都市基盤整備にあわせ、近隣商店街の振興をはかるため、モールの整備の気運もあった。そこで、各事業が整合性をもって展開される様、地区全体の将来像を設定し、居住環境の総合的な整備方針を

策定することとした。

まちづくりワークショップは、地区住民へのヒヤリングを基礎に、①まちを歩いて点検する、②まちの特性と仕組みを見つめる、③まちづくりのテーマを設定する、④まちの環境のあり方を構想する、の四つの過程を経て進められた。また、この調査と併行し、より広く柔軟な視点でまちを認識するため、馬場小学校の協力を得て、四年生を対象に学区内の遊び場調査を行った。この中で子供達に人気のある遊び場の一つとして、通称「かに山」の存在が確認された。

馬場町は、二十数年前まで、低地部は田園、周囲の丘は雑木林がある横浜の典型的な谷戸景観をもっていた。しかし、現在、まちの緑を感じさせるのは、斜面に残された緑地であり、それも斜面住宅開発により急速に減少しつつある。「かに山」は斜面にうっそうとした樹林が残り、山裾からのわき水には「沢がに」が棲息する、子供にとって自然と戯れられることができる貴重な場所である。

また、山すその平地は、以前、盆踊り、もちつき大会、防災訓練など、町内会活動が行われた所であったが近年駐車場として利用され恒例の行事が行いにくくなっていった。そこで、地域の「ヘソ」といえる当該地を、何とか公園として担保する方策はないか、地権者と市で検討した結果、「借地公園方式」を採用する目途がたつた。

小さな公園づくりだが、身近な自然を大切に生かし、地元の人々と市の職員が共に参画し、具体的な成果を獲得する意味は、小さくないはずである。いよいよ、まちづくり型公園整備の開始である。

三——公園づくりワークショップ

①まちづくりのいろいろと「かに山公園づくり」

まちづくりのプロセスを考える場合、様々な展開の方法がある。今回の「かに山」の進め方を、他と比較すると、表1の様になる。

住民にとっては、「かに山公園づくり」を通じ提案する場があることにより、自分達の思いが実現していくという、公共施設としておそらく初めての体験となり、行政にとって

は、直接、地元の人々の意見を通じて、まちの姿をより生々と感じとれる機会となることをめざした。

つまり、結果も当然の事ながら、計画のプロセスを重視した公園づくりといえる。その上で、最大公約数としてまとめたものではなく、馬場町ならではの公園のあり方が模索された。

②ワークショップのプロセス

まず、計画を進めるにあたり、鶴見区職員を中心に、緑政局、都市計画局、建築局等約二〇人により、自主的な活動グループ「かに山とまちづくり研究会」が結成された。準備作業として、研究会メンバーの学習もかねて、地域住民約一〇〇人の人々へのインタビューを行い、人的資源の発掘、地域組織、歴史、生活等を把握した。これと併行し、地域を楽しく再認識するため、子供会のお

表1 まちづくりのいろいろと「かに山公園づくり」の場合

企 画	計 画	調 整	施 工	管 理
行政の調査による企画	行政単独の計画	住民説明を行わない	行政単独の施工	行政単独の管理
地元へのヒヤリングをふまえた企画	地元の意見を参考にした計画			行政・地元とで役割分担する
行政・地元共同で企画	行政・地元共同で計画	行政の青写真を説明する	住民の手のこんだ施工を大切に	行政が地元住民に全面的委託
地元から行政への陳情による企画	地元住民による計画	住民との話し合いにより改善していく	住民単独の施工	地元住民が自主的に管理

母さん方と「タウンオリエンテering(町内名所めぐり)」を企画し、七〇人あまりの子供達が参加してくれた。

これらの経過をふまえ、馬場町のまちづくりの課題を整理し、「かに山公園」の利用イメージを豊富にするため第一回の相談会を持つことになった。以後、計画の決定まで数回

表一2 かに山公園づくりの流れ (61年3月~62年4月:1年1月)

59	ワークショップ「川とまち」においてかに山児童地主さんとの交渉により用地のめどがたつ	瓦版、その他公園づくりを支える運動	9	(かにかいなくなつた!) 15 瓦版 かに山(四)発行
61	3 顔合わせ会	研究会グループ 公開クイズ(大芝台公園・新川緑道・東北ニュータウン内公園12・美晴台公園・芦花谷第4公園野川こども文化センター・羽根木プレハブパーク)	10	公園づくりが盛りだくさん(のてはないかと抱えて)増ひるかる 19 馬場町人運動会
4	6 子どもの遊び場調査 ☆	4 瓦版 かに山(三)発行 16 瓦版 かに山(三)発行 (遊び場マップへマンション住民から苦情)	11	11 瓦版 かに山(四)発行
5	18 タウン・オリエンテーリング ☆ WS.1 構想づくり	12 瓦版 かに山(四)発行 30 瓦版 かに山(四)発行	12	27 瓦版 かに山(四)発行
6	6 WS.2 プランを描いてみる 15 子どもたちのプランづくり 29 WS.3.3 案にしほりこむ	22 瓦版 かに山(四)発行	62	1 18 WS.5 かに山公園計画の決定
7	11 3案の内容を班ごとに教 12 つめる 15	(地元の手による地ならし) 30 瓦版 かに山(四)発行	2	25 瓦版 かに山(四)発行
8	24 WS.4 実物人模型を体験する バーベキューパーティ	3 馬場町 夏祭り 9 瓦版 かに山(四)発行 12 御意見箱設置 (貴重な御意見類)	3	湧水上部の住宅排水調整がすすめられる
		5 29 かに山公園オープニングパーティ		瓦版 かに山(四)発行

の相談会がもたれた。その経過については、研究会メンバーによるミニコミ紙「瓦版かに山」を通じ、町内の全世帯に配布された。また、町内の人々の意見を広く求める方法として、御意見箱を設置した(表一2参照)。

ワークショップを進めるにあたり、ともかく子供から大人まで、楽しく参加できることを目指した。そのためには、頭だけで考えるのではなく、遊びの精神を大切にし、イベ

ントやゲーム等を出来るだけ取り入れる工夫を行った。これらは、自ら体を動かし、五感全体を働かすことにより、新鮮でこだわりのない発想や意見の交換を行うための大切な要素であると考えたからである。

③ ワークショップ手法のねらいと効果

● タウンオリエンテーリング(町内名所めぐり)

町内の特徴ある場所や歴史的な場所、事物などを再認識し、また、計画地とその周辺が、今、どのような状態になっているのかを楽しみながら、子供達にも認識してもらおうと考え、ゲーム形式でイベントを開催した。計画の流れでいえば、いわゆる現地および周辺状況の調査等のあるところ。

町内に一二のポイントを設け、決められた時間内にその場所を回り、各ポイントで、簡単な問題を出し、その場の印象を深める工夫をした。また、交通量の多い道路を通らせない、走ったら減点し、全員がそろって移動するなど、安全の配慮を行った。

賞品や道具の用意は、地元子供会のお母さん方が行い、内容の提案、準備の協力を研究会メンバーが行った。

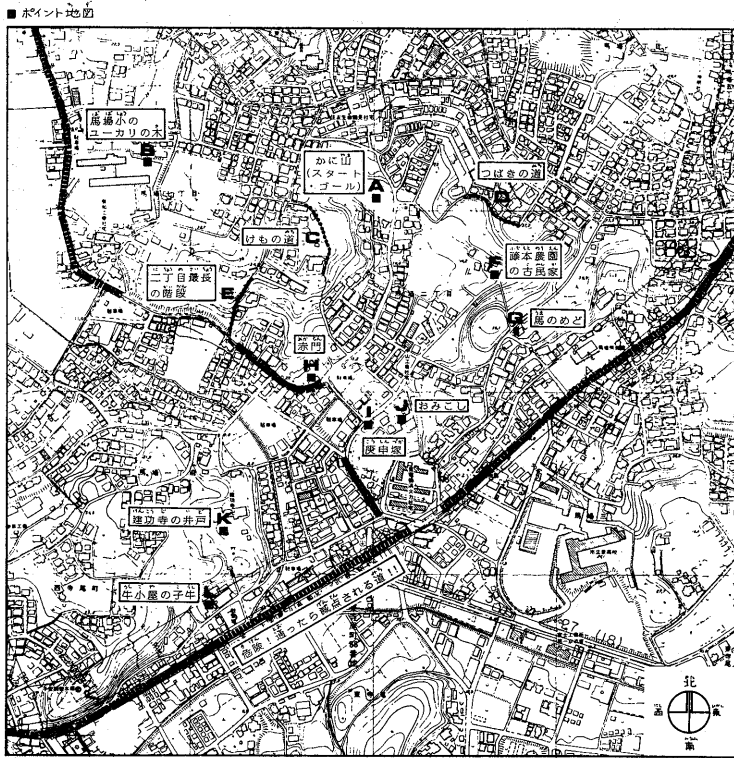
当日、その場で、年齢構成が多様となるように、八、九人のグループを編成した。出発時点ではお互いに遊んだこともない者同士ということ、不満の声もあったが、ゴールの時は自然にリーダーができて、和気あいあい「やった！」という雰囲気ができあがった。

このイベント自体は子供会の行事に研究会がサポートする形で進められたが、地元と市が協力して行うワークショップの端緒として、お互いが顔見知りになり、現実とその楽しさを体験した効果はかなりあったと思う(図一3参照)。

● 子どもの遊び場調査

畳二枚分ほどある大きな地図に、子供達が遊んでいる場所を書きこんでゆく。地図に慣れると、子供の遊びの種類、傾向、その空間スケール

図-3 タウンオリエンテーリング



ポイント	シール	得点
A	かに山 (スタート・ゴール)	
B	馬場小のユーカリの木	40
C	つばきの道 ? 両端の方向の「光る塔」を見つければ	30
D	つばきの道 ? 公園に咲いている花の色は	30
E	二丁目自衛隊の跡地 ? 階段の段数は	30
F	誠本堂の古民家 ? 屋根をふいている材料は	20
G	馬のめど	30
H	おみこし ? 何年に建てられたかな	20
I	後中塚	10
J	おみこし ? 作るのにかった時間は	30
K	辻の井戸	40
L	花小屋の子守	50
☆	チームワークの素晴らしいグループへのボーナス	70
☆	こうかんした各カード1枚につき20点	
	得点 小 計	
X	通行を禁止されている道を通った時の減点	50 50
X	走った時の減点	50 50
X	決められた時間に達した時の減点	50 50
	減点 小 計	
	合 計 得 点	

等を知ることできる。今回の場合、地図そのものが大きく、身体を動かしながらの作業となったので、ゲーム的要素があるといえる。また、この作業を行う際も、年齢構成が多様になるよう、グループ分けを行った。そのため、高学年の子供が低学年の子供の面倒をみる場面が見られた(写真1-1)。

研究会のメンバーが、各グループに一人加わり、ヒントを与えたり、作業の手助けをした。スタッフにとって、初めての経験であり、事前に十分な打合せがなされたとはいえず、多少のとまどいはあったが、子供達は自らのグループの書き上げた成果に達成感を得られたようであった。

遊び場調査の方法は、地域の状況を把握する上で、短時間(一時間半程度)の割に有効な方法であり、今後のまちづくりを進める上で凡用性があると考えられる。

●プランニング・キット

公園に対する考え方や要望を端的に表現する方法として、公園の平面図を画いてみる方法は、よく行われる。しかし、この方法だと普段、絵を画き慣れていない人の場合、うまく表現できないことがある。プランニング・キットとは、子供や素人も自分の考えているプランを表現しやすくする手段として考えられた。あらかじめ、何枚かの紙に印刷された、樹木、遊具、人間、野外卓、バレーコート、ゲートボールコート等、公園のエレメントを用意し、模造紙にかかれた公園敷地にそれらをはりつけて、プランニングしてゆく。プロでさえ頭を悩ませる作業となる平面プランニングは、非常に労力が必要とし、空間を考える困難さはプラン創出のマイナス要因となる可能性をもっている。また、出来上がった一つの案に、固執してしまいがちである。いくつかの案を客観的に評価する場合、表現やスケール感が共通していることは、比較検討しやすくなる。

ただし、これを使う場合も、タイピングが重要であり、それをうまくおさえて使わないと、ただ適当に物を置いただけで終わってしまう恐れが

ある。それぞれの事柄について、場所との関係でイメージがある程度はつきりとしてきており、そのイメージを表現するための補助手段として、うまく使わなければ効果が半減してしまふ。

今回の場合は、参加者が自ら考えていることを議論した上で、ネライが明確になってきており、絵として視覚的に表現したい気持ちの高まりをとらえ使用したので、うまく作用したように思う。その後の案のしぼりこみ作業についても、比較的スムーズにいった。

●現地シュミレーション・ゲーム
これまでの過程で、しぼりこんだ三つの案を、図面を使った部屋の中の討論から、実際に現地で展開し、その空間のスケール、感触などを直に体験し、各々の案の良い点、悪い点を抽出し、比較検討の材料とした。

公園施設のエレメント（かにの門柱、アスレチック、実のなる木、テール、あずまや、花だん等）を、劇の道具のようなものにし、各案

ごとに置きかえていった。訪れた参加者は子供達も含め、指定されたポイントを巡り、実際にある姿を想像しながら、感想をまとめてゆくイベント形式で行った。

このイベントに先立ち、地元と研究会メンバーで公園予定地を清掃し、相談会の後、全員でパーベキューを囲み、自由に交流をはかる等、内容豊かで楽しい一日を過ごすことができた。この作業を通じ、ほぼ一案にしぼりこむことになった（写真1・2）。

●御意見冊（御意見箱）

相談会に出席できない人々も、その考えを述べてもらおうとアンケートを用意した。三つのプランのポイントを書いたものと御意見冊用紙を全戸に配布し、それに意見を記入して、公園の敷地に設置したポスト（御意見箱）にいれてもらう方法をとった。

相談会にこそ出席できないが、実際に現地を見たり、関心を持っている人もかなりいることを感じた。様式がなく自由に記入するものとした

写真-1 子どもによる遊び場プランニング

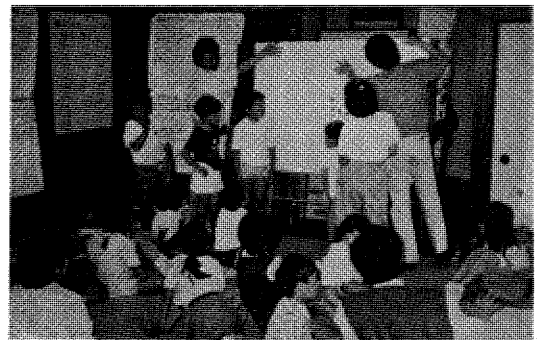
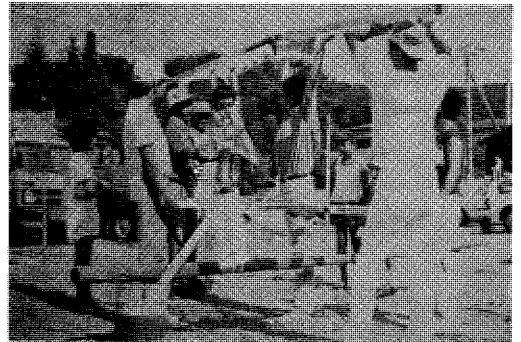


写真-2 現地シュミレーションゲームの風景



ため、短い文章でハッキリと表現したものが多かったが、中には、長文のものもあり公園にかける期待感や提案の内容は、我々研究会のはげみになるものが多かった。

●瓦版かに山

馬場二丁目自治会は、約九〇〇世帯、二、六〇〇人の大きな町内会である。この中で住民参加を唱えても参加できる人はほんの一部にすぎない。それでは、住民参加の意味もないし、「町会の庭」として大切にしたいという意図も全体には

伝わらない。公園づくりの活動には参加できない大多数の人に、せめて活動状況だけでも伝えよう、という趣旨で「瓦版かに山」を発行した。

内容は二つの柱で構成した。一つは、その直前に開催されたイベントの様子や相談会の結果、もう一つはまちの中の話題や情報を載せた。

瓦版は全戸配布とした。回覧にすると読まずに回してしまう人もあるだろうし、読みたたくてもじっくり読まずに回す人もいるかもしれない。また他の広告などにまぎれても目立

つように黄色い紙を使用した。

この瓦版は意外に(?)好評であった。まちで初めて会う人に自己紹介する時「瓦版をつくっている○○です」と話した方が通りがよかったですし、「ああ、かに山ね」といわれれば話もスムーズだった。中には、番号から全部ファイルしてある、という人もいた。公園づくりに陰で参加してってくれる人も多いな、という感じがして、意外な効果がうれしくまた心強かった。

四——まちづくり道入門——各担当の感想等

①—区の職員として

かに山公園づくりには、一五人程の区役所の職員も参加した。住民参加という人手がかかる活動を手伝いながら、普段出ることの少ないまちに出かけ、まちづくりを学ぼうという研修の目的で参加したわけである。相談会やイベントでは裏方として、その間には、瓦版の編集・発行と、一連の活動の中で欠かせない存

在であった。

しかし、何といっても、区役所の職員が果たした役割とはやはり、住民と局とのパイプ役であったといえる。相談会のような改まった席だけではかすんでしまう小さな意見や不満等を局に伝え、また地元へ投げ返す。局と地元の人二者だけではできにくい、こうした細かい配慮のやりとり、それを担ったのが区の職員であったようだ。立場は言ってみれば「半官半民」。区の職員は、半分はまちの人の立場でものを言う必要があるようだ。仕事柄、町名はよく知っているが、その町がどこにあるのか、どんな町なのか、全然知らないという職員が、実際に地域に入り、まちづくりや公園づくりについて、まちの人と話をする。研修としてはそれだけでも十分かもしれない。毎日の自分の仕事を、また新しい目でみつめ直す機会になったと思う。

しかし、まちづくりの中で自分たちにも何かできるのではないか、何かやりたいと思っている職員は少な

くない。彼等の意欲を研修の範囲の活動だけに終わらせてしまうのはなんと惜しい。日常の仕事も業務であるが、地域に入り、まちづくりに参加することも、広い意味での職員「業務」であると思う。

一つの例として、世田谷の、「職員支援制度」がある。これは、日常の業務とは別に地域のまちづくり活動の中へ職員が参加するという制度である。いわば「第二の業務」といえるかもしれない。いろいろ問題はあるだろうが、地域に密着した行政が望まれている今、区役所のあり方、関わり方について世田ヶ谷区の例も含め、議論されてもよい時期にあるのではないかと思う。

②—公園担当として

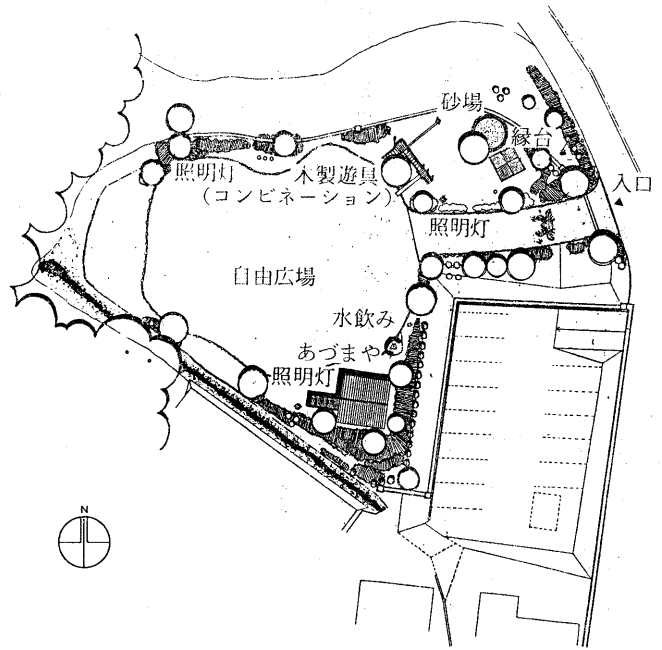
私がかに山公園に関りあいを持つたのは、六十年代に住民参加方式を取り入れた、大口駅前公園の整備がきっかけだった。その後、機会があったら自分もこの様な方法で公園づくりをしてみたいと思っていたが、それは、公園のプランニングの手法

としての可能性云々、街づくり云々と言った理由よりも、もっと地元に入りこんだらどうなるのかと言う単純な疑問であった気がしている。そして六十一年度かに山公園の担当となり、身をもってそれを体験することになった。

始めてみると、予想はしていたがとにかく遅い進み方だった、また進め方も途中何度も書きかえられ、内、外に対しても何度も話し合いが持たれた。区の職員、公園担当、コンサルタント、地元がいていてイメージがなるべく近いものになる様に、様々なやり方が考えられ、そして行われた。その中で、イメージは固まり、単に公園をつくる、という意識から住んでいる環境をつくるという意識へより積極的に変わってきたと思う。

ところで、住民参加方式の場合、それで何が変わるのか、という問いがある。それは施設にまつわる主に公園の使われ方、管理等のソフトの部分になるのではないかと思う。これも、答えが出るのにはまだかなり

図一4 かに山公園



の時間が必要であり、今後、関係した人々が、どの様に動き変化してゆくのかに興味あるところだ。

住民参加方式のプランニングは、普通の進め方に較べて手間と時間がかかる。しかし条件がある程度整えばかなり有効な方法であると感じた。これからは機会あるごとに実績を積み上げ、現実の効果を生みだしていく事が必要だと思ふ。

私自身、できるだけそれに関わっていきたいし、まだこりてはいない。

③—コンサルタントとして

馬場の人たちは、私のことを鶴見区の職員だとしばらく思っていたらしい。「えーっ、役所の人じゃなかったの? どうも変だと思っていたのよね」と言われたのは、ずい分後になつての事だった。

インタビュアーや相談会(ワークシヨップ)で馬場町へ出掛ける時は、誰かしら役所の人と同行することが殆んどであった。概ね区役所のかに山公園担当と思われて不思議はない。でも、何度かインタビュアーに来るけれど、一向に属するセクションがわからない。聞いたような気はする。服装が少しくだけている。あるいはだらしない。どうも不明瞭なその立場は、実情の一面を表わしていたかもしれない。

役所の仕事は年度単位で区切られているのが普通であり、かに山も例外ではない。が、住民にとってこの期限というものは、どちらかという実感に乏しいと思う。何しろ、馬場の人たちにとって公園づくりに参加すること自体初めてのことであり、プロセスの全容は未体験である。更に、集団創造である以上、会議の進め方は予想しにくい。興味のおもむくままにひとつひとつ吟味して進めていくには時間の余裕はなさそうである。と言って、あまり急ぎ過ぎると住民参加が単なる手続きに

なつてしまう。それでは馬場の人たちは納得しないだろう。このような状況の中で何枚もプログラムは書き変えられていった。

また、役所での打合せにおいて「三月までに竣工しないと困るんですよ」と言いながら担当者と一緒に頭をかかえた。設計作業を急ぐ間に、一回瓦版が抜けてしまったことを後に子ども会のお母さんにずばりと指摘された。

どうにか間に合はしたものの、時間の面でハラハラした公園づくりだったと思う。

④—都市デザイン担当として

身近なまちづくりを試みる時子供目を通じ、多くのことを学ぶことができる。今回の「かに山」の発見のように、大人以上に、まちな面白さを体験している面がある。しかし子どもを考へる場合、ともすると子どもそのものに目が集中しがちになる。子どもをとりまく環境全体に目を向けると、大人社会の影響が大きいことに気づく。活気のある

まちは、子どもの好奇心を刺激し、応えてくれる。楽しく暮している大人と共に生活するのは、子どもにとって幸せなことだ。

馬場町は、町内会の役員さん方の努力、子ども会のお母さん方の思い、お父さん方のソフトボールチームの輪等々、多くの恵まれた条件がそろっている。今回のワークシヨップは、これらの人々に支えられ、気持ちよく進めることができた。横浜に生れ、暮らしてゆく人々が増えてゆくことを考えると、今後身近な生活環境に対する関心が、ますます高まってゆくと思われる。今回の作業を通じて具体的なきっかけさえつかめれば、まちづくりに参加する人材が、多くいることを実感した。

しかし、地元も役所側も、従来の方式で管理されている方が楽であることも、また、事実である。主張をもつことは、同時に責任をもつことになる。あまり気負わず身近なところから、興味のわくテーマを通して

楽しく始めることが大切である。具体的な活動を通じ、人々の連がりさえできれば次のステップへと発展してゆくことが、可能になると思うからである。

今回のワークシヨップを通して、まちづくりに情熱を持つ集団の役割が大きいことを知った。モノづくりに入る前段の準備を進めるには、住民にも、行政にも、ボランティアな活動が要求される。第二、第三の「かに山とまちづくり研究会」ができるとともに、恒常的にまちづくり活動を支援する「センター」を創り出す必要があると思う。

五月晴の日曜日、竣工した「かに山公園」で盛大な開園パーティーが開かれた。集まった人々は、出来上がった公園に、一種のほこりを持っているようであった。今年、馬場二丁目子供会の入会者が倍増し、恒例の夏祭りにもぎやかに行われたのである。この間の活動の一端のあらわれだとするならば、「まちづく

り道」入門を許されたのかもしれない。

五——新たなはじめに

私達の研究会のメンバーが、御意見冊を通じ、はげまされた手紙を、新たなはじめに向け、紹介させて頂く。

——この夏、久方振り、いや、何十年ぶりに、「かに山」にホタルを見ました。それも、二〇数匹、三〇匹以上、点々と遊飛している様は、昔の夢の様でした。子供(孫)が、「じいちゃん、ホタルを見に行こうと言うので行ってみましたら、正に、ホタルがいるではありませんか。本物です。「オーツ」と思わず声が出ました。また、翌晩も翌晩も行きましました。数日後、また行きましました。まだいました。正に源氏ボタルです。(中略)流れに面した法面には芝を植えて流土を防ぎ、流水面水辺には生草を植えて、小さな繁みを造り、

清流保存、生棲保存をしてやりましょう。皆が、その気で協力願えれば私は今、団地の清掃係をやっておりますので、芝を分けてもらいます。自転車に少しづつ運んで、私が植えても良いと思います。一度にみんな全面は植えられませんが、長い日数をかけて、少しずつ目的を達成します。(中略)ホタル見物に行った時

孫が、「おじいちゃん、取ったらいけないんだよ」と言いました。大人は、すぐ、その気になるものです。私の心が動く前に、子供に教えられました。「あーっそうだ。」と大変良いことだと六十八歳のじいおが、ハツと思いました。(中略)わしにしてやれることは、こんなこと位です。子供が大きくなった時、必らず思い出すでしょう。——

△奥村玄△農村・都市計画研究所／田中弘子△鶴見区政推進課／宮沢好△都市計画局都市デザイン室／山口健太郎△緑政局建設課△